橋本　健二　著

『女性の階級』



（PHP 研究所、2024 年 4 月、294 頁）

橋本　健二

いまから 40 年近く前、社会学系の大学院生の間では、マルクス主義フェミニズムがちょっとしたブームになった。フェミニズムやマルクス主義に関心をもっていた大学院生は自分の研究に取り入れようとしたし、そうでない大学院生も、多少の知識は仕入れておこうという気になっていた。マルクス主義階級論を研究テーマとし、これを計量的な実証研究に応用しようと考えていた当時の私は、他の大学院生たちとは異なる視点から、マルクス主義フェミニズムに注目した。出発点となったのは、A・クーンと A・ウォルプが編集した『フェミニズムと唯物論』（抄訳が『マルクス主義フェミニズムの挑戦』というタイトルで勁草書房が出版された）に収められたジャッキー・ウェストの論文の「女性は階級構造の中の最も論争を呼ぶ領域を占めている」という一節である。どういう意味か。

現代の階級理論では、被雇用者をすべて労働者階級とみなすのではなく、専門的な技術や責任ある役職をもつ人々を、新中間階級として区別するのが一般的である。それでは、事務職は新中間階級なのか、労働者階級なのか。管理職に連なるキャリアをもつ新中間階級と考えることもできるが、末端の事務作業に従事する労働者階級と考えることもできる。ここには性別が関わっており、男性事務職は前者、女性事務職は後者の性格が強い。つまり職種の意味が、男性と女性で異なるのである。これは他の職種にも、ある程度まであてはまる。女性は、専門職といっても看護師や保育士などの準専門職であることが多いし、販売・サービス職でも管理職に昇進することは少ない。

また少なくとも日本の場合、女性の賃金は男性より格段に低いことが多いから、世帯収入は、したがって暮らしの豊かさ、生活様式や意識も、配偶者の有無と配偶者の所属階級によって左右される。だから女性内部の格差を考えるときには、本人の所属階級だけではなく、配偶者の有無と配偶者の所属階級も考慮しなければならない。

マルクス主義フェミニズムの基本的な着想は、資本主義と家父長制が接合しているという点にあった。しかし、これだけでは抽象的で分かりにくい。ここに階級という補助線を入れてやれば、接合の意味が明確になる。男性に対して従属的な位置に置かれた女性たちの間の格差は、本人の所属階級だけではなく、男性である配偶者の有無と配偶者の所属階級によっても規定される。このとき女性たちは、たとえば経営者の妻、ダブル・インカムの新中間階級、労働者階級世帯パート主婦、非正規雇用のシングルマザーなどの形で存在する。純粋資本主義社会ではない家父長制資本主義の社会では、女性たちはこのように複合的な階級的位置をもつのである。

こんな発想から、社会調査データの分析を行うようになって約 30 年になる。本書はジェンダーと階級に関する、私のこれまでの理論研究と実証研究の成果を詰め込んだ、初めての一般向け単行本。手に取っていただければ幸いである。

（はしもと　けんじ　早稲田大学人間科学学術院教授）